Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

幼稚園で飼っている動物と子ども達のかかわる姿をめぐって

元田万紀子
（山口大学教育学部附属幼稚園）

1．はじめに

ウサギやニワトリを飼っている園は結構多い。私の園でもウサギ・チャボ・モルモット・インコを数匹ずつと、他にカメ・金魚、季節に応じて子ども達が家から持ってくる色々な小動物を飼っている。特にウサギ・チャボ、モルモット、インコについては、5歳児が主となって年間を通して継続的に飼育活動（餌やり、水替え、掃除）を行っている。

動物が好きだったり興味を持っている子ども達が生き物と触れ合う時に見せる安心しきった表情や、予期しない出来事が起った時の発見の驚き、喜び、又悲しみの表情や表現等を見つめ直す時、飼育は確かに心の育ちにおいて重要な保育の一部であると考える。色々な感動を与える生き物の存在を考えた時、飼育のあり方を今一度振り返る必要があると思う。子どもと生き物が触れ合う『場』をどう価値づけ、保障するかで活力ある飼育活動となるか、あるいは『かわいいね。』『かわいそうよ。』『よくお世話してあげようね。』を繰り返す浅い飼育活動に終ってしまうことにもなりうるのではないだろうか。

2．研究方法

本研究は園で飼っている動物と子ども達との触れ合いの場面をいくつかの事例に出し飼育のあり方を考察したものである。

事例は主に昭和62年度5歳児クラス（男児14名、女児12名）と教師、実習生による保育実践からである。

3．実践事例及び考察

（事例概要）　・動物好きの子ども達が集り一日中チャボとかかわって遊ぶようになる《事例1》　・仲間の一員として飼育小屋から連れ出して遊ぶ《写真》・チャボを網で追いかけ回しその扱いに困る《事例2》・生まれたばかりの野ねずみを子どもが家から持ってきたが、その処置に困る《事例3》　・ウサギが逃げ手分けして捜すが見つからず、尋ねウサギのポスターを作る《事例4》　・金魚の様子がおかしい事に気づきどうしてだろうと調べてみる《事例5》

T_1 — 担任	T_2 — 養護教諭	S — 実習生
○ — 女児	□ — 男児	

〈事例1〉　9月28日（晴）　飼育当番の仕事が済んで（浩）「まだずっとここにいたい。」T_1「いいよ。」（恵）「これブンブクって言うんよ。あの白いのはにげ足はやはや。」　T_1「ブンブクはぴかぴかの羽つけておしゃれね。先生ブンブクの絵を描こうかな。」（弥）「私ブンブク持ってあげる。」T_1と子ども達とで小屋からチャボを連れ出し、絵を描く用意をする。描いている傍らでチャボを歩かせたり、追いかけたり、「何してるの。」と4歳児の（直）（あゆみ）がのぞきにくる。

〈考察〉　飼育は動物の世話をすることだけではない。好きな遊びの一つでもあると思う。たっぷりと満足いくまで過せる時間を保障し、又金網から外へ連れ出し身体ごと遊ぶことで一層親しみを持ち楽しさを味わうようになるのではないだろうか。

〈事例2〉　10月9日（晴）　ウサギを抱きたいが手でつかむのは怖い様子の（裕）、虫採り網を見つけそれでウサギをつかまえる。S「かわいそうよ。」（裕）は聞かずに今度はチャボを追う。数羽がとび上がり台の上に止る。（裕）と（文）は台をどんどんたたき、右へ左へと逃げる様子をみてゲラゲラ笑う。S「だめ。かわいそうよ。やめなさい。」何度も注意するが聞かない。（裕）「わかった。もうしないから先生あっち行ってて。」2人は相変らずチャボを追いたてて喜んでいる。

〈考察〉　大人と幼児の見方は明らかに違う。同じになろうはずもないが、おもちゃ的扱いの中にもかわいさのあげくという場合もあれば、抵抗できない弱い者に対しおもしろさのみの場合もある。残酷な行為ということを死なせる前に教えるのか、様子がおかしくなったことを子ども自身が気づくまで待つことが自分の行為を振り返ったり、命があるということを知る上でよいのか、今だにわからない。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

＜事例3＞ 10月2日（晴） 生まれたばかりの野ねずみを見つけたので、子ども達に見せてやってほしいとある母親が巣ごと持ってくる。目もあかないが、小さな手が動いている様子を誰もがじっと見つめている。興「小さいから触ったらだめよ。」と言いながら他のクラスにも見せに行く。どうやって育てたらよいかSがペット屋に尋ねると母親から離したから死ぬだろうとの事。どうしてそんなひどいことをするのかと逆に注意されショックだったと T に報告する。10月3日、野ねずみが生きているうちにと思い、T「今日は、野ねずみの赤ちゃん、お山のお母さんの所へ戻そうね。お母さん寂しがっていると思うよ。離ればなれはかわいそうよね。」と子ども達へ話す。

＜考察＞ 予期しない出来事が飼育にはつきものである。生を受けたものがすぐ死ぬこともあるのは自然の摂理ではあるが、残酷な気がして子ども達にはうそをついてしまう。真実を子どもと見ていくのがよいのか、それはもう少しあとでわかってもよいのだろうか。生きものには飼ってよいもの（飼えるもの）とその日のうちに逃す方がよいものとがあるように思う。

＜事例4＞ 12月4日（くもり） ウサギが2匹門の外へ逃げたらしい。大は近くにいたTと捜す。大「僕木に登ってみはるから。いたら○のサインを送ることにしよう。だめだったら×。」とポーズをとり合図を決める。あちこちの木に登ったり、園内中をかけめぐりTと出合っては無言でサインをおくる。結局見つからない。T「うさぎどうしてるかな。」哲「車にひかれているかも。だって信号わからないでしょ。」色々と心配する。T「にげました。ひろってくれた人知らせてくださいって貼り紙してみたらどうかな。」全員賛成する。「幼稚園の電話番号はなに？」「こんなウサギとこんなウサギだった」と絵に描いたり、グループで1枚ずつポスターを描き貼りに出かける。

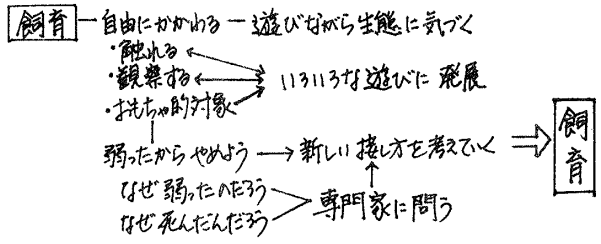
＜考察＞ 大人は見つかるはずはないとわかっているのであきらめがちになるが、子ども達はそんな時こそ見つけることを楽しみながら捜し続けるところを認めたい。「こうやって逃げていった。」と表現してみせる子がいた事を補足する。ポスターは T が多少こだわって子どもをひっぱっているが、喜んで取り組んだ活動となる。

＜事例5＞ 2月16日（晴） 淳「先生、金魚の様子がおかしいよ来て。」見ると斜めに傾き元気がない。香「お水を替えたらいいんじゃないの。」淳「お魚のお医者さんっている。」と聞く。T「いると思うけど、お魚の病院どこにあるかわからないな。」淳「じゃペット屋さんに聞いたら。」T「聞いてみようね。」問い合せてみると、水温が下がると病気になりやすいとの事。子ども達に知らせるが翌日死ぬ。お墓を作りながら、T「寒い寒いって死んだんだよ。」「あったかくしてあげようか。」邦 うんうんとうなずく。草にくるんで土にうめる。

2月18日 淑「先生、もう一つの金魚、おなかがふくれている。きて！きて！」お弁当の準備をしていたが、10人位が水槽へ走っていく。淑「また病気かね死んだらあと1匹しかなくなる。かわいそう。」剛「お家に本があるから持ってくる。」良「お兄ちゃんなら何の病気かわかるかも知れない。」

＜考察＞ 生きものを飼うということの意味の中には、毎日その様子を気にかけたり観察するということを含んでいると思う。「今日も元気でよかった。」と喜んだり、様子がおかしい時こそ「なぜだろうか」考えたり専門家に尋ねることで、より一層生きものへの関心を深めていくと思う。

4、まとめ



飼育はこうするものだと決めつけず、過程を大事にすることに意味があるように思う。飼育の場に誰もが行きやすく、自由な遊びの場として考え、保育者もたっぷりとそこで楽しめるよう心がける必要がある。そのためには保育者自身が生きものの生態をよく知っておくことにこしたことはない。命を尊ぶことは大切なことだが早急に言葉で伝えてしまっていることも多いのではないかと思う。

5、今後の課題

「動物は他では得られない程のすばらしい教材となる」といういくつかの実践記録を読むと、動物が苦手で無知な私はまだまだと痛感する。だからこそ、子どものつぶやきに耳を傾け一緒に考えていこうと思う。"生"や"死"を堂々とむかえたいと思う。

［参考文献］

・保育研究 1982 季刊 3-1 第9号 平井信義 相川書房

NII-Electronic Library Service